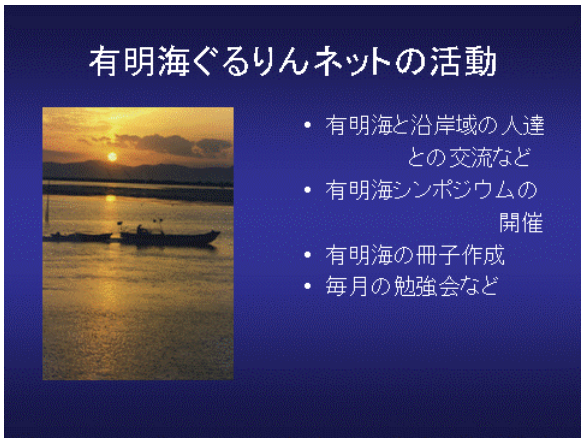
～風景で見る有明海～

NPO 法人有明海ぐるりんネット　北村和秀

【講演に先立ち、有明海のビデオを約 5 分間上映】

はじめまして。ＮＰＯ法人有明海ぐるりんネットの北村です。話の前に、見ていただいたビデオで有明海の特徴がある程度分かったと思いますが、この後、私が長い間とってきた写真を紹介しながら、いろんな出来事や有明海に伝わるお話などをご紹介していきたいと思います。



今、私はＮＰＯ法人有明海ぐるりんネットという組織に入っています。今日、こちらにお見えになっている、佐賀大学の荒牧先生が理事長をされています。主な活動ですが、まず、毎月第 1 木曜日にサガテレビの会議室をお借りして勉強会をやっています。いろんな専門家から講義をしてもらっていまして、非常におもしろい講座もありますので、是非、みなさまにも入っていただければと思います。会員が 40 名ほどですが、勉強会には、毎回 20 名くらい参加されています。実は、勉強会の後に飲みに行くのが一番の楽しみでして、いろんな方と交流をして勉強しようではないかという会です。それから、有明海の冊子を作成しています。今回は、有明海沿岸の祭りやら観光を取り上げまして、そして人を呼ぼうということでやっています。また、有明漁業協同組合の方から依頼がありまして、この海苔カレンダーを作成しています。今日 2 部持ってきていますので、欲しい方がいらっしゃれば後で差し上げます。そして、シンポジウムもやっていまして、最初は東与賀町で、2 回目は鹿島の浜町、3 回目は大川の大野島のほうでノリを使いながらやりました。このようにいろんな活動をやっておりますが、何よりも、有明海で生活している人たちと交流をしようと、そういう目的でやっております。

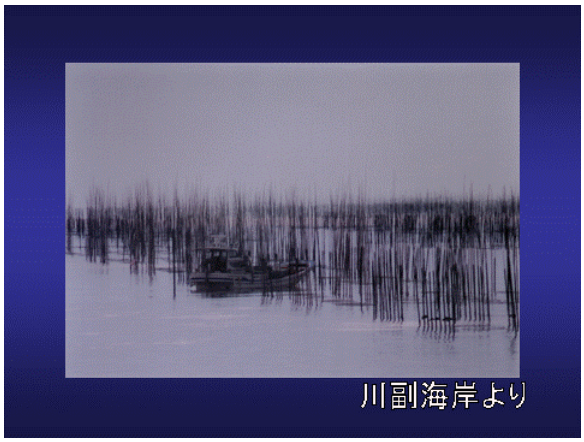
それでは、写真を見ながら進めさせていただきます。

これは、毎年開かれるバルーン大会のときの写真です。バルーンと朝日を一緒に撮った写真、そして、バルーンからみた嘉瀬川河口付近の写真です。

私は川副の広江というところで育ちました。まだその当時は八田江も整地されていませんで、みなさん冬瓜というものをご存知だと思いますが、冬瓜の表面についている白いトゲトゲをきれいにとって浮き輪代わりにしていました。干潮のときにぶらさがって有明海に入って行って、そして満潮にな

るとそれで戻ってくるというようなことをしていました。途中、広江漁港のところですけど、以前は八丁樋という水門がありまして、そこを通って干潟に行って、干潟では水をかけて滑り台として遊ぶ。遊んでいると、のどが渇いてどうしようもないので、干拓で栽培しているカシウリなんかをちょっとだけ拝借して水分補給をすると。そんなことばかりしておりました。昔は、自動販売機なんかはありませんから、カシウリやスイカが水分補給にはちょうど良くて、それからまた、遊んで家に帰るというふうなことをやっておりました。

次の写真は有明海を川副町の佐賀空港の辺から撮った写真です。私も一時、有明海をカラーフィルムを使ってモノクロに撮りたいと思っていた時期がありまして、その時に撮った写真です。

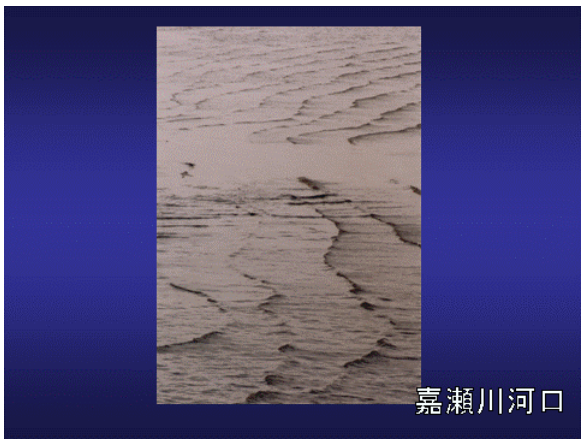

川副海岸より

六角川河口

六角川河口

それから、これは六角川河口で燃えるような夕日が映し出されています。今年の年賀状にも使った、私が非常に好きな写真の一枚です。次の写真も六角川河口で撮影したんですが、船が海苔をとって帰るとき、水面が波を打つわけですね。それに光が当たって非常に美しい。まさしくこういう風景に出くわしたときは、今日一日来てよかったなという気持ちになります。有明水産振興センターのところから撮影したものです。

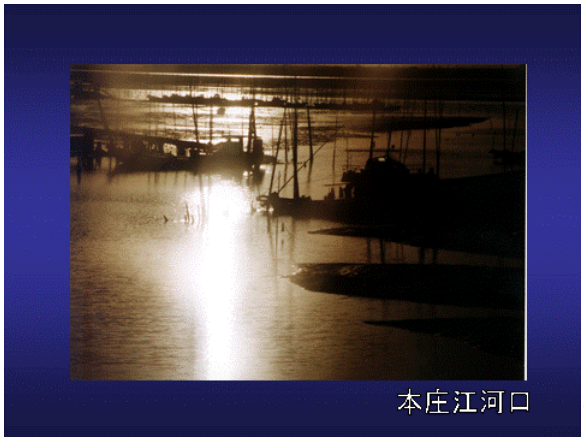
次は、嘉瀬川の河口付近です。船が通った後にこういうふうな波ができて非常におもしろいですね。昨日も行きましたけども、色が変わって、潮が引いていった時にちょうど潮目、干潟との間に千鳥がいっぱい来て小魚を食べる光景が見られまして、改めて、有明海はすばらしいなということを感じました。

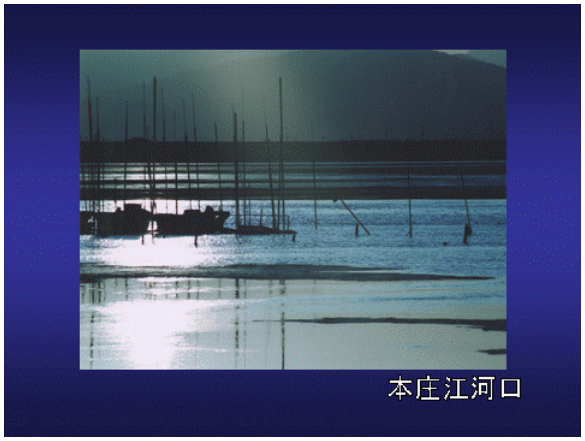

嘉瀬川河口

それから、有明海沿岸にたくさんある、船だまりの写真です。どちらかと言えば、白石から川副にかけたところは、海ではなくて川のほうに船だまりを作っている、鹿島から太良のほうに行くと、直接海に面したところに船だまりをつくっているところが特徴ではないでしょうか。上は、嘉瀬川のところで、下は本庄江の夕日です。

これは、筑後川の下田橋というところです。下田は、筑後川で最後まで渡し舟があった場所で、たぶん、平成５年くらいまで渡し舟をやっておられたのではないかと思いますが、写真は下田に新しくできた橋の上から撮影したものです。

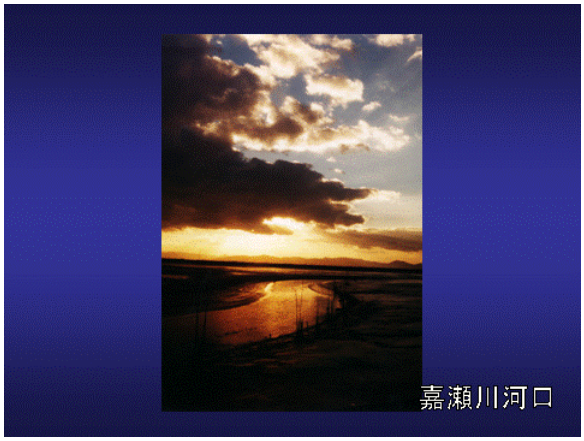
これは本庄江の河口です。この写真も、先ほども言いましたようにカラーフィルムを使ってモノクロに仕上げたいなと思って撮影した一枚で、このような仕上がりになっています。次も同じく本庄江の河口で300㎜ ぐらいのレンズを使って撮っています。非常に陽の反射が面白くて、こういう風になります。これは夕日なんですけれども、レンズの屈折を利用して撮影していまして、レンズの望遠を緩めますと光がレンズに入ってきたときに、ちょっとしたきっかけで赤じゃなくて青色になる。だからこれは非常に珍しい写真で、また、撮ってこいと言われてもなかなか撮れないものです。ちょっとしたきっかけでこういうことができます。上に光がでていますけども、これは太陽光がレンズで屈折したものです。





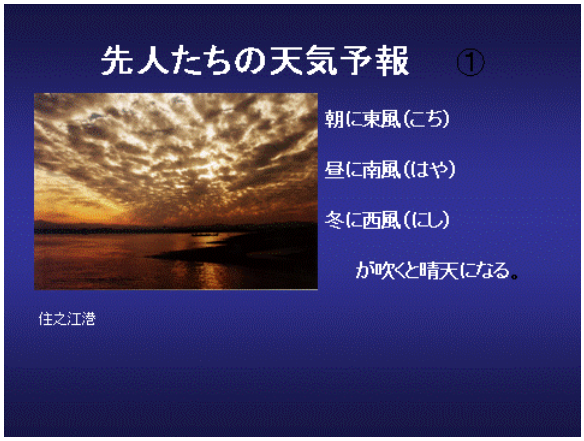
これは、白石海岸のところから、朝、まだ夜が明けないうちに船が出て行く様子を撮った写真です。白石の海岸の船場に道なりに竹を立てて、繋がれていた船が、今から漁にでるというところを青いフィルターで撮りました。次の写真は、その後、夜が明けてきた時に、赤い陽が射してきまして、非常にきれいだと思うんですけれども、こういう光景が見られました。これを撮ったのが 2 月ぐらいでしたが、私は冬場の有明海を撮影するのが好きで、いろんな変化を示すし、雲と併せていろんな光が差し込んだりするもんですから、有明海は見ていて本当におもしろいですね。長年、有明海を撮り続けているんですが有明海ほど変化に満ちたところはないだろうと思っています。

この写真は 12 月に東与賀海岸から撮影したもので四手網のむこうに夕日が沈んでいます。これは、夏とか秋とかに、なかなかこういう風景は撮れないから、おもしろい一枚だと思います。有明海は季節の変化によっていろいろ変わりますし、時代背景もいろいろありますから、写真を撮りながら、有明海は生きているんだな、という風に毎日実感しています。こういう風に被写体としてみる有明海は非常におもしろいと思いますし、有明海の不思議といいますか、有明海に入るいろいろな光を見ていると、有明海というのは観光にぴったりだなと思います。これも東与賀海岸のものですが、これは有明海の冊子第 1 号の表紙を飾っています。

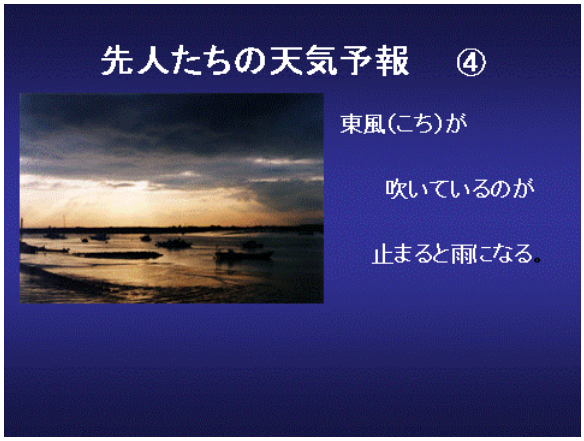


これは、嘉瀬川河口の夕日です。こういう風景はなかなかお目にかかれなくて、私も制作会社に勤めていますけれども、月曜日、金曜日の夜 6 時すぎとか 7 時ぐらいに夕日が見えると飛んで行きたいんですけどなかなか行けなくて、土曜日に行くしかないという、ちょっとした不満があります。次も、嘉瀬川河口の夕日ですが、これは、春とかに見える風景です。これは、夕焼け雲が爆発するといいますか、丸い雲じゃなくて、筋状に広がっている非常に珍しい雲に出くわしましたので撮影したものです。

続いて、先人たちの天気予報ということでお話させていただきますが、ちょっとその前に聞いてもらいたい会話があります。川副町の 80 歳ぐらいの方でないとわからないと思いますが、次の 2 人の会話を聴いて何と言っているかお分かりになりますか。「うんがいのとた」、「とたがちゃ」。わかりますか。「うんがいのとた」、「とたがちゃ」。この会話を訳しますと「うんがいのとた」というのは、「あなたのお父さんはどこにいったのですか。」と尋ねているわけです。そして「とたがちゃ」という答えは、「わたしの父は有明海の干潟に行っています。」という意味なんですね。この言葉を始めて聞いたときは東北のことばによく似ているなと思ったんですが、こういうことばが今、有明海沿岸でなくなってきているということで非常にさびしい思いがあります。そこで、川副町などで「どろんぱ王国」のような場所を作って、お年寄りからいろんなことばを教わったり、ことわざを聞き出して、残しておかなければと思っています。だから、これも非常に好きなことばなので紹介させていただきました。それと同じように先人たちの天気予報ということで、いくつか取材してきましたのでご紹介します。写真は住之江港の夕日で、秋です。うろこ雲です。先人たちの天気予報ですが、「朝に東風（こち）、昼に南風（はや）、冬に西風（にし）が吹くと晴天になる。」ということばがあります。これは、漁民の人たちが漁に出て行くときに、朝、風がど



ちらから吹いてくるかを確かめてから漁に出ていたという、まさに、経験から使っていることばだと思います。その次ですが、「台風は、多良岳から吹いてくるのが最もひどい風になる。」ということばがあります。確か平成 3 年、1992 年になりますけども、多良岳を通って鳥栖に抜けた台風がありまして、瓦がほとんど飛んでしまうとう大きな被害がありました。皆さんもご存知かと思いますが、台風の風を背に当てて、左の方に台風の中心があると風が強いということで、去年、風が強く吹いたとき、有明海の大託間、川副、東与賀の干拓がやられました。多良岳から吹けばひどい風になるということです。そして、「雲が北西へいくと、大風や台風の兆し。」、「南南西の風が吹くと大風や台風はこない。」ということばもあります。これだけ言われているように非常に風を警戒をしたことがわかります。また、先ほど「朝に東風（こち）」といいましたけども「東風（こち）が吹いているのが止まると雨になる」ということばがあります。その他、いろいろな先人さんたちの天気予報にまつわることばで言いますと、「うみたけが音を立つと水害・台風がおこる」と言いますし、「あかぎれが痛むと霜が降る。」、「神経痛がいたむと雨が降る」、「流れはしくい（ハゼ）はやせてまずい」、「７月のワラスボは雨ばかり」など、有明海には、経験から得られた、先人たちの天気予報にまつわることばがたくさんあります。



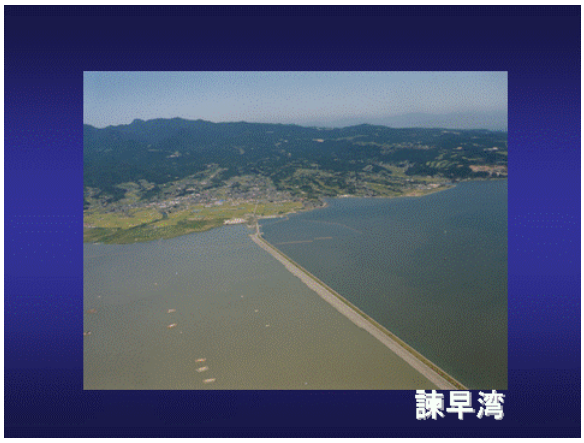
続いてですが、これは背振山山頂から撮った写真です。先の方に雲仙普賢岳があって干拓地が広がっているのがわかると思いますが、先人たちの功績ということで、辻演年さんを紹介したいと思います。辻演年さんは、東与賀町ご出身の方で有明海の干拓事業に命をかけた方です。衆議院議員の福岡資麿さんのお祖父さんである、福岡日出麿さんのお祖父さんにあたる人で、川副町犬井道の海童神社というところには、辻さんの碑があります。辻さんは干拓堤防の「石積み法」を生み出した方で、それまでの堤

防は、木や土などで作られていて長くはもたないのですが、辻さんが作った堤防は東与賀の一部とか川副町の西川副干拓の側面にまだいくつか残っています。この辻演年さんという方は、孫の代までかけても補修を怠らないように努めなければならないと28歳から43年間、有明海干拓事業に従事した方で、長崎のお台場の修復にも携わった人です。東京のお台場もその影響を受けたと聞いています。このような方がいらっしゃるということで、まだまだ調べ足りないのですが、辻さんの堤防を見に行ったとき、やっぱりしっかりしているなと思いましたので紹介しました。

これは多良町の大浦というところで堤防から撮った写真です。早朝に漁に出る船を撮ったものです。実はこの場所というのは、1992年に鹿島市の山口礼子という人が古美術商の外尾容疑者と共謀して旦那さんを有明海に落として水死させたという事件がありましたが、その事件は有明海の干満の差が解決したということがありました。これは事件現場の写真ですけども、山口礼子は、1999年に多良の隣の小長井で、自分の次男を有明海に突き落として殺したという事件がありまして、長崎県警が山口礼子のウソを見破って逮捕したわけですが、佐賀県警は1992年の事件のときには、誤って海に落ちたという山口礼子のことばを鵜呑みにして司法解剖もなにもしていなかったんですね。その後で1999年の小長井で起こった事件のときに、その山口礼子の自供によって、佐賀県警が大恥をかいて逮捕したわけですが、それはどういうことかというと、山口礼子のご主人が水死した日は大潮で、海に落ちた深夜は潮がかなり引いていたわけですね。だから、落としたら岩があって外傷がいっぱいあるはずだが、外傷も全然なかったと、そして、水が無いわけですから水死するはずがないということで、犯罪を立証できたわけです。これも有明海独特の事件だなと思います。

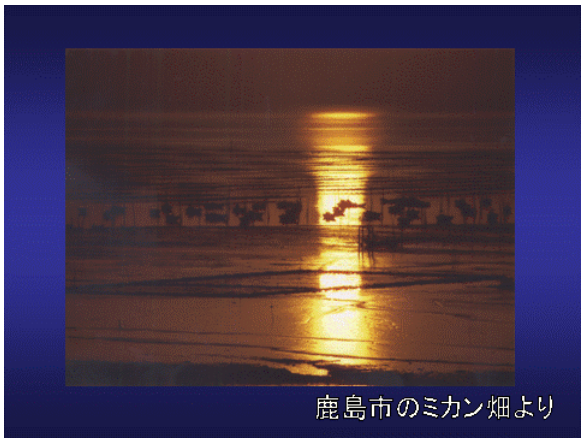
次は雲仙普賢岳ですが、私の友人が大村でセスナ機をもっていまして、私も普賢岳を取材したことがありますので乗せていただきました。1991年6月3日に大火砕流がありまして、私の友人もその火砕流に巻き込まれて亡くなって、合計13人の方が犠牲になりましたけども、私もこの後、すぐに取材部隊としてニュース報道のほうに行きました。行きましたところ、布津町のモーテルで、島原市

の隣の深江町の隣の布津町というところにいたんですが、モーテルの窓を開ければ目の前に火砕流が流れているというところで取材した経験がありました。非常に大惨事になりましたけれども、今、私のデスクの上に水無川から取ってきた土石流の石をのせているんですけども、友人たちの慰霊をする形で石を祀りいつも忘れないようにしています。その時に撮った写真ですが、1997 年 4 月 4 日、ギロチンの後、手前が諫早で、向こうが竹崎になりますが、色が本当に茶色くなってすごい色でした。そして諫早湾になりますと青緑している。この茶色の水が流れ出したらどうなるんだろうとか、いろんな思いをしながらこの写真を撮っていました。他にもあるんですが、これが一番、分かりやすい写真で、この手前の色とむこうの色が違うのがなにか影響があるんだろうなと思っている状況です。



事件とか暗い話ばっかり続きましたので、次は、雑誌などで紹介されたところをご紹介したいと思います。これは、芦刈町の桜の里というところから撮影しました。この写真を撮りに行きましたら、久留米、大分、福岡ナンバーの車がいっぱいいて、いいカメラで十何人が写真を撮っていまして、陽が上がってくるのを今か今かと待っているわけですね。そして陽が上がった瞬間、次々にシャッターを切る音がしていたんですけど、私がここで非常に残念だったのが、写真家のマナーなんです。そこは桜の里という名があるだけあって桜の木がたくさんあるんですが、写真を撮りにくいからと桜の枝を切っているんですよ。私はそういうことまでして写真を撮りたいのかと疑問を感じました。そういった心ないことをやってまでいい写真をとるんだという事に、私は残念でたまりませんでした。この塩田川河口では 12 月の中旬から 1 月末ぐらいまでこのような写真が撮れるんですが、2 月になりましたら太陽がこっちのほうに移動してきまして、ちょうど谷間のところに陽が上ってくるようになります。ここは雑誌などに紹介されていて、有明海の海苔ひびと塩田川の関係が非常に評価はいいようです。私が取ったその日

はちょうど雲がかかっていたんですけが、晴れている日は大牟田湾も見ることができて、是非一回、4 月の桜が咲く頃はきれいなのでご覧になられてはと思います。



次は鹿島市のミカン畑からですが、昨年、鹿島の七浦地区でウォーキング大会がありました。道の駅から歩いて山のほうに行って、ミカン畑を通るコースがあるんですが、そのコースの帰りにですね「ここからいい写真が撮れそうだな」とめぼしを付けていた場所で撮った写真です。船だまりが有明海に面していまして、その先のすぐ目の前に海苔ひびがあって、いい風景だなと思いました。この時、持っていたレンズが 1000 ミリのレンズと 300 ミリのレンズと 200 ミリで、それを使って撮りました。

そして鹿島、多良には、海に桟橋が出ていて船だまりのここに船をとめたり、その先の潟の中に道が、潮が満ちたら消えてしまうという道があります。

これは植樹祭が行なわれたときに撮った昭和天皇のお写真です。昭和天皇は昭和 36 年と昭和 62 年に植樹祭にお見えになって、学者らしい歌を詠っておられます。有明海再生機構の事務所にもあったんですが、「めずらしき海蝸牛（うみまいまい）も　海茸も滅びゆく日の　なかれといのる」という歌で、海蝸牛というのは貝の一種ですが、海茸などに対する思いやりが感じられると思います。WWF が 1991 年にスイスで世界の自然保護の観点から有明海の自然が危ないという警鐘を示されています。昭和天皇の歌の中に「いのる」ということばがありますけれども、「いのる」という表現は天皇の歌の中で禁句とされているそうです。しかし、あえて「滅びゆく日のなかれといのる」ということばを活用されているということが、非常に昭和天皇の想いというか、願望を伝えているのではないかと思います。これは鹿島に来られた時に詠まれた歌と聞いております。それから、植樹祭のあとで東与賀干拓に来られたとき

はシチメンソウを見られました。私もその現場に居ましたけれども、なかなか干拓の堤防からシチメンソウがある下に降りてこられないんですよ。興奮されてですね、随行の方の双眼鏡を取ってのぞかれて、予定は 15 分ぐらいだったんですが 45 分ぐらいかけて見られました。そしてシチメンソウを見て帰られたというような、非常に有明海に対して想いがあったのではないかと思います。その後ですね、一般の人にシチメンソウが紹介されましたところ、みんながシチメンソウを取っていくんですね。昭和天皇が見られたところはぼろぼろになってしまって、どうしようもなくなってしまったんです。これはここにしか育たないのに何で持っていくのかと心苦しい瞬間でした。お見せしているのは古い写真ですが、昔は東与賀もこんな形のシチメンソウでした。今、僕が見る限りでは今年一番綺麗なシチメンソウは久保田の海岸のシチメンソウだと思います。赤色がきれいです。それは何故かと考えたら、やっぱり有明海から直接、潮がくるからじゃないでしょうか。東与賀のほうはあまりにも整備しすぎて必ずしも潮がないからではないかと僕は僕なりに思っています。久保田の海岸のほうはきれいに赤に染まっています。これが本当のシチメンソウじゃないかなと思って、今日はこの写真で紹介しました。佐賀市内からいきますと久保田のよらん館を過ぎまして、ラーメン屋の角を曲がって、とにかく真直ぐ南にいけば、こういう風景が見られますので、是非、時間があればそちらにも行って見てもらえればと思います。

　それから、今度は専門的なことに入らせてもらいますが、私はもともとカメラより照明が専門の分野でして、その照明の分野の中に“色温度”というものがあります。色温度というのは完全黒体の古い球を熱していきますと、そこから発射される色の光をケルビンと表現するんですけど、熱していくと始めはろうそくみたいな明るい褐色の色がだんだんと青白くなるという現象がありまして、そういったものを擬似的に作ります。下が昼間の写真です。それにこういうブルーの色温度変換フィルターをレンズの中に差し込んで撮影したのが上の写真です。同じ昼間なんですが朝の風景に見えます。こういった技術が映画やテレビドラマなどで使われています。みなさんもご存知かと思いますが「北の国から」というドラマがあります。あのドラマはロケは全部、富良野ですが、家の中のシーンは全部スタジオで撮っています。そのときは、逆に青ではなくてアンバー（琥珀色のフィルム）を使ってですね、そし

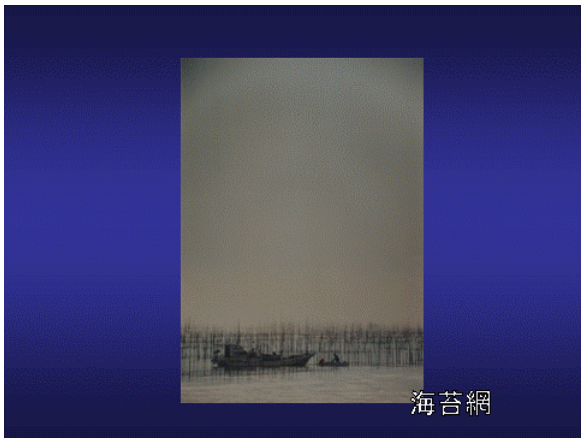
て、いかにもロケをやっているように照明をして、違和感がないようなかたちをとります。だから、この日もこういう冬の日に色の変換フィルターを使うと、今、こういう風な風景がこういう風になります。これは色温度変換フィルターというものを使って撮影したものですが、このフィルターをつける前に撮影したのがこういう風になります。また同じように、これは福所江川の写真ですね。これは河口で撮ったもので昼間の写真です。それにアンバーを入れたら、最初に説明した六角川の風景のように、有明海のきれいな波があったと思いますけどもそれと同じような写真になります。これは実像ではないですがこういうフィルターを入れて撮影することで、面白くなったり、より強調することができる、ということです。ちなみに、このフィルターを使って撮影している、「北の国から」のドラマのスタジオに入りましたけど、レンズを覗いていたら全部が赤くて変な気持ちになるんですが、テレビを通してみると全くどこがロケで、どこがスタジオかわからない仕上がりになりました。

有明海はいろんな漁があります。私はあまり漁の撮影をしていませんが、その漁の中でいくつかご紹介させていただきます。これは手押し網といいまして、河口付近でのんびりとやる漁です。この漁は毎年やっていますが、このときは、たまたま嘉瀬川で見かけたものですから慌ててシャッターを切りました。この漁では海老やアミを取っていまして、アミと言いますと徐福伝説をご存知かと思いますけど、徐福伝説で言えば諸富町に搦（からみ）というところがありまして、徐福さんが上陸したとされる場所です。その徐福さんの上陸地点である搦（からみ）ではアミを捕りません。ひとつも捕りません。なぜかというと、徐福さんが乗った船が傾いたときアミが集まってきて沈まないように持ち上げたという言い伝えがあって、搦（からみ）の人たちは徐福伝説を信仰していまして、今でもアミに感謝して、食べないんですね。ただ、お隣の川副町早津江ではアミ漁が盛んでアミを食べるし、有明海の珍味としてもてはやして、今でもアミ漁をやっています。本当に、有明海でもすぐ隣同士なのに、食文化一つとっても違うところがあって、おもしろいなと思います。

次は、四つ手網です。昔は、写真のように有明海沿岸に並んでいまして、大牟田あたりにもあったそうです。これは数年前に東与賀の海岸で撮った写真だと思いますが、潮の満ち引きを利用してエビや魚などを捕るわけですが、最近はこういう漁が少なくなって寂しいような気がします。でも、今、佐賀の

城内の建設会館のところで、多布施川で、この四つ手網を使って魚や海老を捕っている方がいます。あんなところで捕っているなんておもしろいですね。是非、見て下さい。

そしてノリですね。ノリといえば私が思い出すのは、私は川副町広江というところで生まれたんですけど、当初のノリ養殖は静かでした。ノリを採ってきてから天日干しをしていたころです。しかし、その後、機械化が始まって機械がものすごくうるさくなって、乾燥する機械なんかも一晩中ガタガタガタガタ動いているし、家と家も接近しているものですから、その騒音に泣かされたという記憶があります。また、ノリを洗って、その水をそのまま流すから堀やクリークが真っ赤になったところがあって、小さい頃のノリ養殖というイメージは、色で言ったら「赤」というイメージがありました。この写真はワラスボかきですね。これは東与賀海岸で撮った写真ですが、今でもされています。冬は漁をされませんが、昔からの伝統的な捕り方です。



これは昇開橋の夕日です。ここは砂地で、以前はしじみが獲れていました。しかし、いろんな説がありますけれども、砂が流れて来ないとか、それと併せて有明海の異変がおきてしまいまして、今ではしじみが取れなくなっています。ただ、春先はエツが楽しめるところでありまして、エツも徐福さんにまつわる伝説とか、弘法大使が千切った葦の葉がエツになったとかいう説がありますが、この昇開橋は、しじみが取れていた頃から時代の移り変わりを見ているような気がします。今ですね、大川側に昇開橋温泉というところができていまして、非常にいい温泉でして、そこのお風呂から昇開橋や船の動きを眺めることができます。ここら辺も徐福さんが上陸したというような伝説がある場所ですが、今年の10月4日と5日に徐福の国際シンポジウムが佐賀で開かれるようになりました。会場が吉野ヶ里になっていますので、その時にはそちらで楽しんでいただければと思います。

的入り神事（太良町）

的入り神事（太良町）

次です。昨年の 1 月 8 日に有明海の冊子の取材をしまして、太良町の御手水地区の的入り神事に行ったときのものです。この地区は平家の落人たちが身を隠した場所で、みなさん平家の子孫の方なんです。今は、10 世帯、20 人ほどの方が住んでおられまして、今年も、この地区で的入り神事が行なわれたという新聞記事を見ました。この祭りに使う弓矢は近くの笹竹などを切ってきて、全部手作りされていて、約 5m離れた的をめがけて矢を放ちます。これによって家内安全、五穀豊穣といったものを祈願するわけですが、もともと、的入り神事というのは 1400 年ぐらい前に景行天皇が戦いの勝利を記念して腕試しに矢を放ったとのが始まりといわれています。昔は他の有明海沿岸地区でも行われていましたけれども、きちんと昔からの神事を継承しているのは、この御手水地区だけではないでしょうか。400 年くらい前の鍋島藩の地図を見ると、落水という地名が見られまして、この落水が御手水となったのではないかと思っています。

それから、これは沖の島参り、お島さん参りというお祭りですが、私は、これを初めて見たときに高千穂の神楽を思い出しまして、この沖の島参りは有明海の観光の目玉になるのではないかと思っています。沖の島参りは、旧暦の 6 月 19 日に行なわれていまして、昔、雨乞いのために海に身を投げたお島さんという伝説の方が祀られた小島をお参りするものです。お参りする船の中には太鼓や笛が積まれていますが、唯一、牛津の砥川地区には、鐘浮立という太鼓と笛のほか鐘を積んでお参りをしています。このお祭りは、旧暦の 6 月 19 日の 8 時くらいから花火大会から始まりまして、沖ノ島に上陸して、お参りするということで、夜を徹して続きます。私もここ数年ほど行っていますけども、これが非常に面白いといいますか有明観光のひとつの名所になるのではないかと思っています。以前、川副町広江には、夕陽を見る観光船がありました。夕方から酒を飲み始めて、有明海の夕日を眺めて、というものでしたけ

お島さん参り

お島さん参り

れども、中止になった理由は、参加している人は酒を飲んでいますから、帰りが飲酒運転になるというものだったようです。しかし、これをバスやタクシーを使うなど送迎をきちんとして、有明海の観光の目玉にすればといいと思います。

有明海とは本当にすばらしいところですから、是非そういうところに来ていただきたいです。

沖の島

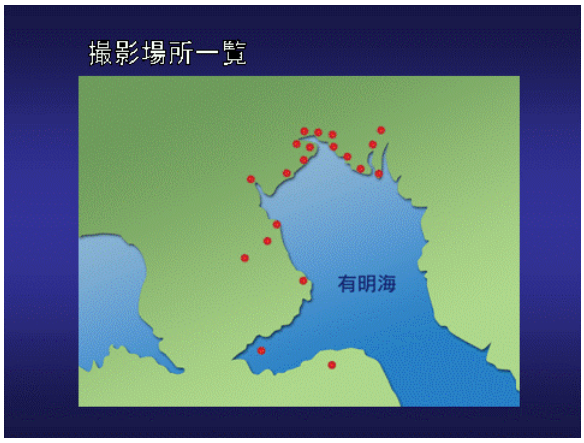
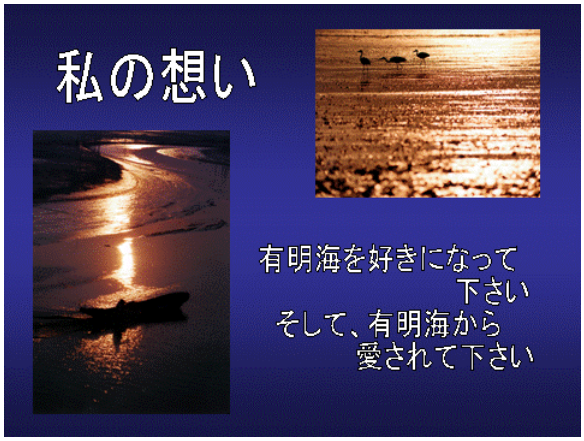
川レンコン掘り

川レンコン掘り

川レンコン掘り

次は川レンコンを紹介します。この間、千代田町で行ないましたけども、千代田町が合併する前に、レンコンフェスタという、福岡の人たちと交流を持つ目的で川に自生するレンコンを掘って、その後に交流会をやりました。これは新聞記者の人から聞いた話ですが、昔、鍋島藩が、人材教育の奨学資金を得るために、レンコンを売って奨学資金にしていたそうで、それを黒田藩が見て、うちにもレンコンの苗を貰えないかということで、今、福岡の裁判所の前に残っているレンコンがそのレンコンだという話も聴いたことがあります。本当かどうかはわかりませんが、そういう話もありまして、川レンコンというのは、土堤などの下のすこし固い土のところにありまして、それを胴長を着て掘るわけなんですが、川レンコンは山芋、自然薯といっしょで非常に粘りがありまして、天ぷらなど、揚げて食べるともちもち感があって非常に美味いですね。今でも、千代田地区では正月料理に川レンコンを使うそうですが、こういうおもしろい祭りがなくなるというのはさびしい気持ちです。もう一度、このレンコンフェスタは復活していただければと思います。

これは今まで取った写真のポイントです。下からいけば、雲仙の普賢岳、諫早湾、大浦湾の事件のあったところ、御手水地区、鹿島の桟橋、塩田、芦刈町の桜の里、白石海岸のところ。ここら辺は数え切れないほど回っています。夕日の位置によってあっちに行ったりこっちに行ったりしています。あとは、東与賀、千代田、大川の昇開橋というところで撮影しています。



最後ですけど、わたしの想いということで、わたしは NPO 法人の有明海ぐるりんネットの仲間ですけど、仲間に入っていらっしゃる方はやはり「有明海を、有明沿岸を、元気にさせようよ」と。そして、「みんなで盛りたてていこうよ」という趣旨でやっています。その中で私も、写真を撮っていますけど、皆さんにお願いしたいことは、「有明海を好きになって下さい、そして、有明海から愛されて下さい」、ということです。そうすると、いろんなことが解決できるのではないかと思います。先ほども言いましたが、小さい頃はノリの乾燥騒音で悩まされていましたし、クリークが真っ赤になりました。今はそういうことはありません。お互いに有明海のことを好きになると、ものすごく愛されていくと思います。私も後 2 年で定年になりますが、有明海を今後も写真を取り続けていけたらなと思っています。これで終わりますが何かありましたらご質問に答えたいと思います。今日は本当にありがとうございました。